2018.12.20

大草

読書メモ

102．ロジェ＝ポル・ドロワ（土居佳代子訳）「歩行する哲学」ポプラ社（2018.10）

**＜ロジェ＝ポル・ドロワ（土居佳代子訳）「歩行する哲学」より＞**

人間は「歩く存在」であり、歩行と言葉と思考には密接な関係があることを哲学者の例を取り上げて解説する面白い本である。歩くときの身のこなし方や歩いた場所を観察して、その人の思考の仕方を素描するというのが著者の目的である。

〇　歩行　：　片足を前に出し、転びそうになってもう片足を前に出し、バランスをとって回復し、

　　　　　　　前に進む行為のことである。

〇　言葉　：　次々と繋げていくことにより、意味のある言葉をなすもの。

〇　思考　：　ある考えも批判や審査を受けて、その考えを検討し、その考えを修正・破壊し再構築するなどして、進展していく。

・歩行・言葉・思考の三つは、同じ組み立てや構造をしており、共通したものがある。

・哲学者は、古代から現代まで散歩しながら思索してきた。

〇古代ギリシャ・ローマの哲学者たちは、哲学を語りながら、よくそぞろ歩きをした。中世の思想家たちは徒歩で旅をしたが、近代人も孤独な散歩者となったり、民衆のデモを率いる理論家となったりして歩いている。

〇ギリシャ・ローマの哲学者たちは、歩きながら、一歩一歩真実に到達すると言い、また、真実は到達不可能であると言った。

〇プラトンの「洞窟の比喩」：『国家』に登場する囚人たちは、洞窟の中に繋がれ、自分たちの影だけを見せられ、それが、現実であるかのように思わされた。影の姿が現実であると思う錯覚にとらわれていることに気付かねばならない。真実を知るためには、洞窟の外へ歩いていく必要がある。影絵の世界を出て、真実と永遠のイデアを見出すために歩く＝考える必要があると言える。歩くことは考えることと同じとなるといえる。

〇アリストテレスは歩きつつ語った。当時、貴族たちは、レスリングや拳闘を毎日して、身体を鍛えた。運動するときは素裸で身体にオリーブオイルと細かい砂を塗ったとのこと。また、いつも歩きながら考えたり、話したりした。その当時、数人でグループを作り、散策しながら考えることが流行っていた。ギュムナシオンという体育場で体を鍛える前と後に歩き、哲学の話をしていた。身体の鍛錬と理性の鍛錬は絶えず結び付いていた。

〇アリストテレスは、様々な動物の歩行について研究し、「動物運動論」と「動物進行論」を書いた。

　人間の歩行について、脚の交替の動きを正確に素描している。このため「散策の人」とあだ名された。

〇セネカは時代を跨いで散策した。生きること、それは歩くことだ。彼は単に空間を散策するのではなく、時を超え、思考の歩みによって時代から時代へ移動してソクラテスやヘラクレイトスとまるで彼らがそこにいるかのように対話するのだ。

〇アポロニオス（1世紀の人）は世界の英知を求めて歩いた哲学者。ギリシャ→　バビロニア→　インド→　ローマ→　エジプト→　エチオピア→　カシミールと歩いた。インドの賢者（バラモン）は、時間の中を歩くのも、空間の中を歩くのと同じぐらい簡単な事であった。

　アポロニオスは、イエス・キリストの注目すべきライバルと考えられていたこともあった。

〇ブッダは、中道を歩いた。何もない空間には、目標もなく、停止することもなく、果てしなく歩くことができる。これを「空」をいう。そこでは、座ったまま、動くことなく歩くことが可能となる。逆に歩きながら不動でいることができる。歩くことと歩かないことは、全く同じことなのだ。ブッダが中道を歩いたのは、こんな風にだった。

〇老子にあっては、人ではなく世界が歩く。また、風が歩く。老子のいう無為は完全なる活動停止でもなく、役に立たないことでもなく、世の中に対し全く影響を及ぼさないことでもない。まさにその逆である。老子の無為は、最高の効能、絶対的能力を構成し、果てしない力で自然、宇宙、世界の歩みそのものと一つになることだからだ。

　風が動いても輪郭を見分けることができない。風にはへりがない。風は流れ、すり抜け、通り過ぎるだけなのに、立ち去りながらその力を及ぼす。風の力は風のなかにあるのではなく、風を突き抜ける。風が力を持っているのではなく、力に所有されている。風は身をかわして自分の代わりに世界を歩くにまかせるのだから。老子はまさに風のようだった。

　老子はロバや牛に、風に、宇宙に身をまかせていた。――（略）――したがって、歩くのは世界であり、老子ではなかった。そして、老子は、歩かないまま、進み、前進し、むしろ片方の足を他方の前に出すより巧みに歩いたとさえ言える。

〇孔子はすべてのものの良い歩き方を考えた。孔子は１５年以上に亘り、動乱期の中国を歩き続けた。目的がなく移動もない歩行を孔子は「仁」と名付けた。

〇その他の人物　：　ヒレル、シャンカラ、ミラレパ、オッカム、モンテーニュ

〇デカルトは、まっすぐに歩く。

〇ルソーは、散歩をよみがえらせた。彼は自然の中だけでなく時代と歴史を歩いた。散策は、思想と世界、体と言葉のまさに継ぎ手である。

〇カントは1789年に遅刻したことがある。フランスで革命が勃発し、人権宣言が出され、共和国憲法が作られた。このため、道順を変更した（新聞を買うため？）。歴史の歩みが個人の道順に優先することがある。

〇ヘーゲルの言う「ひとりでに歩く道」、これが弁証法の定義である。世界が歩いていること、道と歩みは一体であること、歩くことと無関係に存在する歩く人はいないこと・・・を理解していた。

〇マルクスは歴史が歩くのを見た。彼は何度も、歴史の実際の歩みを理解したと述べ、その謎を解明したと主張している。それは、想像と表象の地を去って、物質的・経済的な現実に進むのだと宣言した。

　（大草：史的唯物論のことか？）

〇ニーチェが歩きながら気づいたこと。自分の目標に近づいた者は、もはや歩くのではなく踊っている。（大草：コートダジュールのエズ村にある「ニーチェの道」を踊って通ったのであろう。）

　彼は、異なる角度で、異なる視点でものを見るために歩いた。私たちも時間と空間の標高差、位置の差を求めて歩くのだ。

　大草：哲学者にとって歩くことは、言葉と思考により前進することにつながるのであり、極めて有益な行為であるといえよう！そして何よりも肉体的な健康にも最もよい運動である！特に高齢者にとって！無料で長生きができる！　健康な身体と健全な精神に乾杯！！

以上